

Title	C.S.ルイス研究 : 霊より生まれたる者の物語
Author(s)	小林, 眞知子
Citation	2008 年度 博士論文 要旨
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2147
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

2008 年度

梗概

博士論文

(指導教員 山形和美教授)

C. S. ルイス研究

—— 《霊(πνευμα)より生まれたる者の物語》 ——

"The wind (πνευμα) blows where it wishes,
and you hear the sound of it, but cannot tell
where it comes from and where it goes.
So is everyone who is born of the Spirit."
(John3:8)

「風は思いのままに吹く。
あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、
どこへ行くかを知らない。
霊から生まれた者も皆そのとおりである。」
(ヨハネによる福音書 3 章 8 節)

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
(博士後期課程)

学籍番号 106DC001

小林 眞知子

C.S. ルイス研究 —— 《霊(πνευμα)より生まれたる者の物語》 ——

梗概

ルイスは、作品の豊富さ、その著作はナルニア国物語、詩集、SF小説、神話物語、文学研究書、文学史、キリスト教神学と弁証家としての著作、書簡集、自叙伝など多様なジャンルを自由に往来して作品に仕上げている点において多作な作家である。また極めて広い範囲にわたり、社会的、教育的影響をもたらしている。オックスフォードとケンブリッジの大学教師として、文学サークル、神学的討論会を通して、子供たちとの手紙の交換、またBBCの放送による宗教講話を通じてエキュメニカルなキリスト者の共通理解を促進したこと、その晩年の恋愛結婚が映画化されるなど多くの人々の興味、共感が寄せられ、作品は多数の言語に翻訳され、相互理解の道を開いたことなどからもその社会的ひろがりを見ることが出来る。

この論考では、作家ルイスが創作において表現しようとした物語を主題に沿いながら——キリスト教、憧れ、理性、想像力、愛、ログレス、ナルニア国物語、詩論について——その思想と文学表現に統一性を与えている発想のありかを検討してみることを目的としている。その手引きとしてルネッサンスのキリスト教プラトニズムの世界観の理解が求められ、ルイスは宇宙像、人格、霊性の問いかけなど存在の全体を捉えるために導出したモデルを支持している。もちろん、それはテキスト世界におけることだが、文学理論という狭い意味、ある新しい文学理論を確立する、あるいは方法論的に支持するための実践的作品の生産ということよりもっと広範囲に及ぶ視野をルイスは持っている。

基本姿勢は、外なるものではなく、作品の中に根ざしている生来の固有の論拠を用いてルイス自身が世界をどのように把握し、表現しようとしたのか、境界の発想、可変的な生成の世界と不変的永遠の世界、古代異教世界とキリスト教との関わりなどについて考察することにある。そのようにしてルイスが探求し見出し表現しようとしたテキスト世界を読みすすめていくと、ルイスという作家に固有の物語構造や表現の反復性にみられる関心領域の特質、文学の受容、内面に生起するものを言語化する技法、中世・ルネッサンス文学を専門分野とする文学研究へと赴く必然性などが対象として捉えられてくる。

そうした文学作品はその作家の理解するルイスの場合はキリスト教の深みに根ざして根をはっている。序章〈キリスト教とルイス〉はルイスの信仰の立場を理解する上での予備的考察を行う。

第一章〈憧れ〉 *Sehnsucht* は根源的探求に向かう人間の動機を問う。憧れについて書くことは、必要性や有用性という意図に限定されえないルイスの文学世界の発動力を語り継ぐことである。物語詩人として至福の記憶を辿ることは、作品世界の中では可能的行為に出立する起動因であり、またその指標の特異点として身体的な知覚によってエデンの園の喪失の記憶が呼び覚まされる。至福の喜びの想起は主観的な願望の投影ではなく、まったく他なるものでありながら生来的なものへの回帰のインデックスとなっている。ルイスがなぜ別世界を描こうとしていたのか、古典の集積に埋蔵されている憧れの源を訪ねていくことにより真の故郷への意識が鮮明な具象的なものとされる発端のテキスト世界の呼びかけが指示される。

第二章〈理性〉を定義してルイスは自然のなかに食い込む超自然の勢力集中点であるという。思考が正しさを追及することが可能となる条件、基準の正位置が据えられる根拠として理性的思考の権威が問題とされ、古代アテナイの英知に溯り、理念的な原型を求める視点が与えられる。理性は抽象と計算の能力だけではなく、価値認識、すべての善がめざすべき普遍的規範を形造るものである。物象主義、進化論的発生論的人間観、経験的心理主義のもたらす権力意志に疑問を呈し、近代社会が教えるところの自律の精神では乗り越えがたいものを痛感したルイスは、時代精神から解放するものとして超自然の領域に普遍的理性の場を見出していこうとする。そして超自然の自然への介入という奇跡について理性の立場から試みた論証をもとに、信仰との関係について考察する。

第三章〈想像力〉は真理の道具なのではなく意味の道具である、とルイスは考えている。ファンタジーによる表現形態を棲家とするルイスの物語世界は想像力の世界である。たえまなく湧き上がる想像力が、世界に象徴的な具象性を与えることにより深くかかわり絡み合う存在様式に意味を与えている。ルイスは想像というものが、欲望充足の手段としての空想願望、あるいは妄想とは異なる精神活動であることを強調する。〈想像力〉は具象的な視覚的次元にある意味の源泉を言語的次元に変換するエクリチュールの準創造行為としての創作に関わっている。夢としてまた驚嘆として与えられる幻視について、『天国と地獄の離婚』に関する考察を交えながらファンタジーの意味と機能を追及する。

第四章の主題は〈愛〉である。ネオ・プラトニズムにおいて世界の原動力は愛そのものである。「愛は死のように強く……その熱情は燃える火、その炎は神からのもの」(雅歌 8:6) とあるように恋する人間の言語以外には神への敬虔をあらわすものは見当たらない。ドニ・ド・ルージュモンの「愛は、神になることをやめるときにだけ、悪魔でなくなる」

という原則は四つの愛の主題となっていく。ルイスは愛情(storge)、友情(filial)、恋愛(eros)、聖愛(agape)という四種類の愛を概念類型として説明するのみでなく、『愛はあまりにも若く』という神話的創作『アモールとプシュケー』の物語において主要人物の描く人間模様に喜びと悲しみを湧き起こす愛の様態を作品化している。

「愛が高貴で人を高貴にさせる情緒とみなされるべきである」というのは自然に湧き起こる情緒ではなく、西欧十一世紀で生まれた他に類を見ない革新的な情緒の変容であることにルイスは着目し、『愛のアレゴリー』において宮廷風恋愛の〈愛の神〉の教義体系の解釈がアレゴリーに結実していくプロセスを辿る。『薔薇物語』から行き着いた先のスペンサーの『妖精の女王』のマレカスタとビジュレインは宮廷風恋愛の主題に他ならず、貞節ブリトマートすなわち結婚愛の対立者である結婚ロマンスと姦通ロマンスの最後の戦いなのである。

第五章〈ログレス〉にてルイスの書簡体小説『悪魔の手紙』、アレゴリー作品『天路退行』ランサム SF 三部作を扱う。『悪魔の手紙』は悪魔の手口を書簡体形式で露呈させることにより、誘惑者としてのサタンを描いている。直接人間に向けた悪魔のメッセージを言語化した手紙ではなく、悪魔の内輪での策略を、あたかも人間が盗み読みしているような設定となっていることから、このような想定それ自体が人間生活にきわめて異質な様相を付与しながらも現実的であり、真実であるものを隠喩の言語により伝えている。

アレゴリーとは、ある意味で、中世人に固有な思考形態というわけではなく、人間またはその心一般であることから、ルイスは自らの精神的遍歴を『天路退行』に作品化し、キリスト教、理性、およびロマン主義の擁護を目論んでいる。

ランサムの旅する宇宙は不毛の「空間」ではなく「天空の光の海」であり「生命がそこから刻々、身のうちに流れ込む」諸世界の子宮である。マラカンドラにおける墮罪以前の古太陽言語を発見し、ペレランドラにおいて神の似姿(Imago Dei)を知る者となったランサムはフィッシャー・キング(魚夫王)となり、サルカンドラにもどり、存在の暗い根から人間の中に注ぎこまれる力である〈暗黒の君主〉地球の〈墮ちたオヤルサ〉と戦い、言語を贖う者となっていく。アーサー王伝説のマーリンの出現により、体の復活への言及、超感覚的生命と没感覚的生命の違いが語られ、聖霊降臨とバベルの塔の対照の様態が描き出され〈ログレス〉再生の道へと導かれる。

第六章〈ナルニア国年代記物語〉：創造、脱出、律法、知恵、預言、福音、黙示録という七つの段階の予告と予告の成就として進行していく物語としての聖書に現われるイメージ

群や物語が想像力の枠組みをどのように構成しているのかを調べていくと、ナルニアの七つの物語が啓示の系列という観点から照合されその年代史を俯瞰できる。

物語の推進力は子供たちの個性と出来事との間の連結であり、ナルニア物語の統一性を示すアスランの行動は、ナルニアの天地創造、ナルニアの統治における主権の戦い、そしてナルニアの終末へと動いていく相互に関係する一連の諸事象から成り立ち、一定の意義を示していく。天地創造『魔術師の甥』、福音と律法『ライオンと魔女』、自由への道『馬と少年』、歴史と昔話『カスピアン王子の角笛』、預言『朝びらき丸 東の海へ』、知恵『銀のいす』、黙示録『最後の戦い』に繰り広げられる壮大な奇跡の物語の展開を開示する読みを試みる。

第七章〈詩はささやかな受肉〉：ルイスは言葉を用いて造形される文学作品に関して、ロゴスとポイエマの関係から説きおこしている。永遠のロゴスがどのようにして人間のことばとなりうるのか、という問いかけが、詩を作ること読むこと（ポイエマ）とその作品の存在（ロゴス）との関係を根源的に支えている受肉（Logos Incarnation）の教義への関心をもたらす。神の受肉と同じ主題を映し出すおぼろげな鏡としてルイスが指摘する四つの原理を文学作品の具体相の中から見出すことができる。

個性理論の異端性をとりあげ、ティリヤード博士との論争を通じて、浪漫主義のサタニスト崇拝に異を唱えるルイスの立場をみていく。ルイスの提起するものが、「詩とは何に関わるものであるか」という問題全体に及ぶものであり、ルイスが〈物事〉の次元で詩を語ることの意義を、聖なるもの、天空のものの知覚作用として、〈自然界に見えている物ではない〉次元をたえず捉え、表現にもたらそうとしている点に着目する。

ルイスが心象の見本として古代宇宙の最高天(empyrean)を考察する「ダンテの『神曲』の最後の十一曲におけるイメージ」、スペンサーの生み出す自然(natura naturans)の像、ルイスがケンブリッジ大学中世・ルネッサンス文学教授に就任したときの講演「歴史上の時代区分について」*De Descriptione Temporum* をとりあげ、最後にルイスが言語に対して抱く二極の軸として〈詩の言葉〉と〈祈りの言葉〉について考える。

若き日に詩人となることを志していた C. S. ルイスのポイエマの活動による文学の王国なるログレスの世界を旅すると、北風の吹きぬける天空の楽の音が妙なる調べとして光を放ち道先案内しているのを聞き取ることができよう。ルイス研究の副題として《霊(πνευμα)より生まれたる者の物語》としたのはルイスその人のことであり、風は息であり、霊(πνευμα)であり、その燃やし尽くすごとき音色に私たちは驚かされ魅了される。

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
(博士後期課程)

学籍番号 106DC001

小林 眞知子